

目標から逃れられない時代

今、あなたにはどんな目標がありますか。目標を達するために、日々どう取り組んでいますか？

- ・今期中に売上増1億円を達成したいといった、仕事の目標。
- ・来月の定期検査までに、3キロ体重を落としたいという、個人的な目標。

見渡せば、私たちは多くの目標に囲まれています。そして、達成できればいいのですが、途中でどうしたらいいかと悩んだり、あきらめてしまったり、悲喜こもごもです。中には、もう、目標のない世界、目標を達成しなくても平気な社会に棲みたいと思ったりもします。

でも、どうなのでしょう。みずから目標を設け、これをクリアしようとしている動物は、地球上では人間だけなんじゃないのでしょうか。今月の目標が達せられなかった、といって落ち込むライオンやアリを、私は知らないですから。

目標達成3つのワザ

沼地と入り江だったどうしようもない土地～江戸に城を築き、町割りをし、参勤交代などのルールを定め、虎視眈々と豊臣秀頼を追い詰めた、徳川家康という人物は、いったい幾つのプロジェクトを同時進行させたのか。

おそらく彼は、最初に大きな目標を立てたのでしょう。そして、数名のスタッフとともに、What To～いくつかのメニューと、どうやるかという道筋～プロセスを構築したのだと思われます。さらに、古参の家来衆を叱咤激励しつつ、外部のスペシャリストを登用して、実施貫徹を絶対のものにしたのです。

要するに、家康は

Step1・目標の設定

Step2・実施計画の策定

Step3・実施と管理

を実行しただけです。

知の系譜

ちなみに、ビジネスの世界に、年間目標とその実行計画という概念を持ち込んだのは、私が師と仰ぐピーター・ドラッカーです。GMのコンサルティングをやりながら、この目標達成の3つのワザと、リーダーシップ、マネジメントなどのコンセプトを打ち立てたのです。

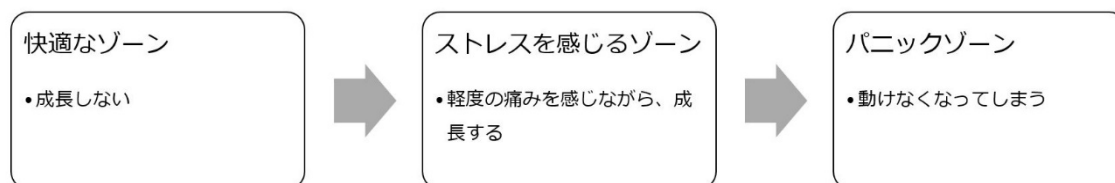
では、ドラッカーの400年もの前の時代に、家康はこれらのことを、どうして知り得た

のか。実は家康は、先輩格にあたる武田信玄に学んでいます。直接教えを受けたわけではありません。

2人が直接対決したのは1度きり～三方ヶ原の戦いで一敗地に塗れて、家康は、圧倒的な武力差を思い知らされます。武田信玄の強さは、いったいどこにあるのか。どう見ても地理的に不利な甲斐の国にいて、何が、信玄を強くしたのか。

それは、信玄が「孫子」のマニアだったからです。信玄が愛読した「孫子」は、おそらく、魏の曹操が著した注釈本でしょう。信玄は自分の軍旗に「孫子」から「風林火山」の文字を当ててるほど、熱中しました。

心理的な負荷と3つのゾーン



弁護士の三谷淳さんによると、

1・快適なゾーンとは

- ・毎日同じような繰り返しの仕事をする
- ・与えられた仕事を黙々と行う
- ・毎月ほぼ同じ給料を受け取る

といった状態のこと。

2・ストレスを感じるゾーンというのは、

- ・新しいプロジェクトを任される
- ・転職、転籍した
- ・面倒を見なければならない部下が急に4人もできた

というところ。

3・パニックゾーンというのは、

- ・会社をクビになった
- ・会社が倒産した
- ・大けがをして、仕事を続けられなくなった

というもので、どうしたらいいのか分からなくなる状態をいいます。

ここで、大事ななのは、できれば人は、少し「ストレスを感じるゾーン」にいた方がいいですよ、ということです。「快適なゾーン」にいるよりも、「ストレスを感じるゾーン」にいた方が、作業効率が高まり、パフォーマンスを発揮するということです。

期限に余裕があってもなかなか着手できないが、明日提出となると、集中力が増して、短時間でいいものを仕上げるということです。私にはそういう経験があります。というか、それを、つまりストレスを味方にして、仕事をしています。

変化を恐れる「現状維持バイアス」というワナ

適度にストレスを感じるくらいに自分を追い込みつつ、仕事に精を出すのが良い、というのは理解できたでしょうか？さて、ここからが難問です。頭では、「ストレスゾーン」に入ると分かっているけど、人は、そういう風にはならないのです。

意志が弱いからでも、モチベーションが低いわけでもありません。人間は本能的に、変化を恐れる動物でもあるのです。変化をすることによって、今よりもっと利益が得られると分かっているけど、、、です。

つまり、人間は、新しいことをして得られることよりも、失う可能性の方を、過大に評価します。ぜったい避けろと、ブレーキを掛けるのです。この選択のスピードと、頑なさ、驚愕に値します。

これを「現状維持バイアス」といい、人間に備わっている生存本能です。つまり、私たちは無意識に『死』と「変化するもの」を天秤に懸けているのです。ですから、大抵のものは「やらない」と結論づけるのです。

- ・転職を考えているが実行できない
- ・不倫から抜けられない
- ・同棲相手と結婚しない
- ・時間ができたらゴルフ三昧したいが、踏み切れない
- ・ダイエットしたいが、つい間食してしまう

死の淵に立つこと

ところで、家康は幼少期に今川家に人質として預けられている時、今川家の軍師・太原雪斎からこの「孫子」を教授されています。ところが、家康はその時はピンときませんでした。ちなみに、雪斎はかつて、若き信玄にも「孫子」を説いています。

ふたりの違いは、家康は人質とはいえ今川家の庇護のもとにあり、あえて「孫子」を実践する必要を感じなかったこと。対して信玄は、実の父親との家督相続係争中で、上杉謙信をはじめとする戦国列強との覇権争いで、「孫子」を実戦で使って生き延びるしかなかった、という切羽詰まった状況、つまり『死』を覚悟したギリギリの『生』の中にありました。

家康が「孫子」の重要性を再認識したのは、信玄にコテンパンにやられ、生命の危機を感じたこと。信長、秀吉との、喰うか食われるか、天下を取るかはたまた死か、という渦中に飛び込んだからです。